

XXIX International Congress of Psychology 2008 Berlin 参観記

高 橋 一 公

はじめに

2008年7月20日から7月25日の日程で第29回国際心理学会がドイツベルリンにて開催された。今回は ICC Berlin (ベルリン国際会議場) を会場として行われ、主催者発表では参加者数は8500人、演題数は9000にもおよび、まさに巨大な学術会議であった。国際心理学会は4年に1度開催される心理学の国際会議であり、回を重ねるたびにその規模は大きくなっている。

今回は、東京未来大学教授の田中マユミ先生との共同研究の一部を“Japanese Students' Images of the Elderly - An analysis by the Semantic Differential (SD) Method -”というテーマで発表するために参加をした。1週間という長い学会開催にもかかわらず、発表が学会の最終日という気が抜けなようなスケジュールが組まれてしまった。発表の原稿を文末に添付し、ひとまずは道中記を綴ってみることにする。

比較的長い行程ということもあり、恩師で立正大学名誉教授の山下富美代先生、立正大学心理学部講師の山村豊先生とご一緒させていただき山村先生と同室することでほんの少し旅費を切り詰めさせてもらったつもりだったが、私も山村先生も「ビール好き」であり、切り詰めた旅費がビールに消えてしまったことも事実である。

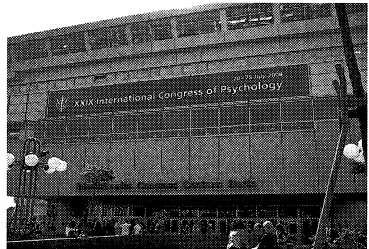
ICP 2008 Berlin 学会参観記

7月19日

ベルリンには7月19日にミュンヘン経由で入った。7月であったがベルリンは肌寒く朝夕はまだコートが必要な気温であった。ベルリンのシンボルであるカイザー・ウィルヘルム教会が猛々しく聳え立つツォー駅の近くに宿をとっていたが、小雨が降るベルリンの町を到着早々探索するほどの体力は残っていなかった。

7月20日

学会初日はICCベルリンにてレジストレーションを早々に済ませ、一旦中心街に戻り、昼食をとった。オープンカフェ風の店に入りまずはビールを口にした。初日は夕方からのオープニングセレモニーが設定されているだけ



学会会場 (ICC ベルリン)

だったので気楽な昼食となったが、やはり日本人には少々量が多いようである。ドイツでは昼食をしっかり食べる習慣があるらしい。

夕方からのオープニングレセプションでは挨拶とパフォーマンスが交互にプログラムされており、飽きさせないような配慮が感じられた。

7月21日

ポスター発表会場の下見をかねて、朝から会場へ。ホールにポスター用のパネルが並べられていた。ところがプログラムに記載されている発表予定のポスターが貼られていないものが多い……。どうやらキャンセルらしい。



ポスター発表会場

さらに、ポスターの貼りだしをしているか否かの確認もない。以前の国際学会では確か事務局による発表の確認があったと思ったが……。いずれにしても少々拍子抜けをしてしまった。

ただ、日本国内の学会比べて非常にフランクであった。ジーンズにトレーナーという研究者も多い中、日本の参加者の生真面目さが目立っていた。

7月22日

学会会場を抜け出して一路ドレスデンへ。個人的には心理学発祥の地ライプチヒに行きたかったのだが……。ベルリンから観光バスで2時間半ほどでドレスデンの街へ到着する。ドレスデンはエルベ川を挟んで旧市街地区とノイシュタット地区に分かれている。も



「君主の行列」（ドレスデン）

ちろんバロック様式の壮麗な宮殿や教会がある旧市街地区に入る。ここでの目的は2つあった。街並みを散策することも含めて、一つはシュタールホーフの外壁にある「君主の行列」を見ることである。「君主の行列」は1123年から1904年までのザクセン君主の騎馬像など総勢93名が描かれているもので長さが101メートルと巨大なものである。さらにこの「君主の行列」はマイセン磁器のタイルに描かれているというものでもある。その価値は測りきれない。

そしてもう一つがアルテ・マイスター絵画館にある2点のフェルメールである。この2点の詳細は後述するがレンブラントやルベンス、ラファエロにボッティチェリなどヨーロッパの古典絵画の名作が展示されている。今回は時間の関係でゆっくりと鑑賞できなかつたのが残念である。

7月23日

ベルリンも4日目となりやっと快晴に恵まれた。この日の午前中は市内

観光を試みた。3時間程のバス観光である。カイザーウィルヘルム教会前から出発してユダヤ博物館やベルリンの壁跡、ベルリン大聖堂、ブランデンブルグ門を廻るコースである。効率的に名所を廻ってくれるので時間がない私たちにはありがたかった。

しかし何か物足りない……。一度宿に帰り路線バスに乗り、文化フォーラムにある絵画館へ。もちろんお目当てはフェルメールである。そのほかにレンブラントやブリューゲルなど名画が目白押しである。個人的に興味を持ったのはルーカス・クラナッハの「若返りの泉」である。日本では「青春の泉」とも言われているが、老年心理学に関わる者として何か考えさせられるような絵画であった。

7月24日

学会会場にて、明治学院大学教授の佐藤眞一先生に会い情報交換をする。佐藤先生はドイツ留学の経験もありベルリンの地理にも明るいということで夕食をご一緒することを約束する。会場でポスターセッションやシンポジウムを廻るがどこも盛況で、プログラム



会場風景 (休憩スペース)

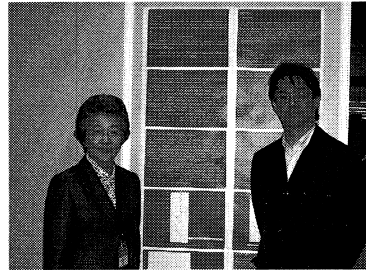
の合間はラウンジなども座るところを探すのも苦勞するぐらいに人で込み合っていた。

一度宿に戻り、山下先生、田中先生、山村先生とともに佐藤先生との待ち合わせ場所、フリードリヒシュトラゼ駅までUバーンを使って移動。その近くにはフンボルト大学がありにぎやかなところである。Sバーンの高架下には骨董店が並び時間を忘れることができる空間を提供しているが、閉店時間が来るとあっさりと店を閉めてしまうなど、ドイツらしい(?) 一面も見られた。

食事には明星大学の岡林秀樹先生、佐藤先生の奥様も合流され楽しい時間を過ごすことができた。食事のあと、佐藤先生御夫妻、岡林先生、山村先生と5人でオープンカフェへ繰り出し、ベルリンの金曜日の夜を楽しませてもらった。

7月25日

いよいよ発表の当日である。形式的に当日の気持ちを表現すると、「学会の最終日でもあり心地よい緊張感が感じられる」となるところだが……、本音を言えば、この緊張感からやっと解放されるという安堵感のほうが強かったといったほうがよいだろう。



田中マユミ先生と(発表会場にて)

午前中の3時間が在籍責任時間となっている。ポスターの貼り、準備を整えて待つ。しかし、最終日ということもあり人も少なめで、ポスターセッションのパネルも空席が目立つ。立ち止まる人も少なくやや緊張感に欠ける状況が続く。Handoutも50部用意したが、最終的に30部以上残ってしまった。大きな学会ではやはり認知心理学や生理心理学などに関心が集まるようで発達心理学、特に老年心理学は関心を持つ研究者がまだ限られているようである。そのような状況なので、田中先生と相談をしながら途中抜け出して他のシンポジウムを覗くなど、他のプログラムへ参加をしてみた。

発表が終わると、午前中で学会切上げフランクフルトへの移動のためにテューゲル空港へ向かった。この日はそれまでの肌寒い気候と違って気温が33度と上昇し、夏らしい日差しがふりそそいでいた。日本と違って暑いというよりは、湿度が低く爽やかさへ感じるほどであった。

テューゲル空港ではエコノミークラスの私と山村先生は空港のスタンドバー

XXIX International Congress of Psychology 2008 Berlin 参観記 (高橋)

でヴァイツェンビアを飲んで時間を過ごした。ここで発表が終わったことを実感し、少し白濁したビールがとてもおいしく感じた。この日はフランクフルトでの宿泊となった。

After Congress Tour

7月25日～27日 フランクフルト

学会終了後、ベルリンからフランクフルトへ空路で移動し、ドイツ散策をする。フランクフルトではライン川下りを体験し、フランクフルト名物というりんご酒にも挑戦する。さらには少ない時間を利用してシュテーデル美術館のフェルメールを鑑賞も試みた。27日にはフランクフルトからミュンヘンへ移動となる。この移動にはICE（インター・シティ・エクスプレス）の利用したが、このICEでとんでもないことになってしまう。最高速度は300キロを誇る高速鉄道であるが、どうやら空調が故障していたらしい。窓の開かず停車駅も少ない列車の車内は、40度を超えているのではないかというようなサウナ風呂状態であり、とても座っていられなかった。乗務員の大柄な男性が愛想よく何度もミネラルウォーターを配っていたのが記憶に残った。

7月28日～29日 ミュンヘン

ミュンヘンでの滞在日数は少なかったが、今回の旅の中でもっとも居心地のよい街であった。バイエルン観光の定番であるノイシュバーンシュタイン城やオーバーアマガウのリンダーホーフ城の見学の機会を得ることができ、ルートヴィヒ2世の世界に触れることもできた。

しかし、ミュンヘンでの最大の収穫は「ビール」である。バイエルン地方の「ヴァイツェンビア」や「ドゥンケルス」は最高であり、個人的にはヴァイツェンビアが気に入った。ちょっと塩のきいたブレーツェルやヴァイスヴェルスト（白ソーセージ）、豚のスネ肉との相性も上々であった。

また、アドルフ・ヒトラーがナチス党 NSDAP の結成集会を開いたミュンヘンのビアホール「ホーフブローイハウス」も見ることができたことも収穫であった(店内に入っただけで、飲食はせずに出てきた)。

29日にミュンヘン空港から成田に向けて出発。30日の午前中に帰国した。帰りにブンデスリーガの「バイエルン・ミュンヘン」と同じ飛行機に搭乗することができたこと、山村先生と「今度はビジネスクラスで行けるようにいろいろ頑張ろう!」と誓い合ったことを付け加えておく。

フェルメール巡礼

今回の訪独のもう一つの大きな目的が「フェルメール巡礼」にあった。ヨハネス・フェルメールについては特に紹介するまでもないが17世紀のオランダ絵画の巨匠であり、「光の天才画家」と呼ばれる反面、現存している作品が少なく、「謎の画家」とも呼ばれている人物である。現在、確認されている作品は36点といわれているが、そのうち1点(合奏)は盗難に遭い現在は所在が不明となっている。また、その真贋が問われているものが数点あることも事実である。

ドイツ国内には6点のフェルメール作品が存在している。今回はそのうち5点を滞在中に鑑賞することができた。スケジュールの合間を見てフェルメールだけを鑑賞した美術館もあった。今回鑑賞した順にその作品を紹介してみる。

「取り持ち女」 ドレスデン アルテ・マイスター絵画館 1656年

風俗画家へ転身した頃のフェルメールの作品であり、フェルメールの作品の中では画面サイズは大きい。宗教画としてのテーマを残しつつも風俗画の様相を持った作品として興味深いものである。

「窓際で手紙を読む女」 ドレスデン アルテ・マイスター絵画館 1658-59年頃

個人的にはその美しさにひかれる作品である。フェルメールの作品としてはまだサイズは大きめではあるが、窓から差し込む光とそこに描かれた人物との調和がとても美しい。これ以降の作品には同様の構図が用いられることが多い。この作品には画中画が描かれていないが、実際にはフェルメール自身によってその画中画は塗りつぶされたらしい。

「紳士とワインを飲む女」 ベルリン 文化フォーラム絵画館 1658-59年頃

ブラウンシュヴァイクの「二人の紳士と女」と比較すると興味深い作品である。フェルメールの特徴ともいえる「窓」「画中画」「床」いずれも描かれている。特に床には幾何学的な模様配置され、その後の作品にも影響を与えたような要素が多く取り入れられている。光と壁に加えて床の幾何学模様が空間の広がり的印象づけている。

「真珠の首飾り」 ベルリン 文化フォーラム絵画館 1662-65年頃

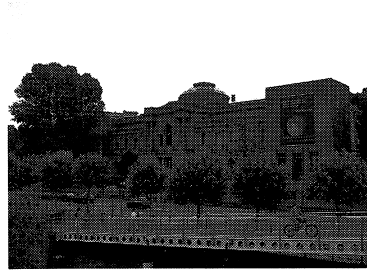
今回鑑賞した作品の中で「窓際で手紙を読む女」と並んで、その女性の美しさに魅了される作品である。全体的には暗い色彩が施されているのだが、それにより窓から差し込む光の効果で女性の姿が輝くような印象を与えている。女性の黄色のガウンがその効果をさらに高めている。フェルメールの作品にはこの黄色の衣をまとった女性が多いのも、光の効果を計算したものなのであろう。

「地理学者」 フランクフルト シュテーデル美術館 1669年

フェルメールの作品で男性だけが描かれている作品はこの「地理学者」とパリのルーブル美術館にある「天文学者」だけである。力強い男性が描かれているのではなく、繊細さをのぞかせるような学者が描かれている。しかし、この作品で最も目を引くのが棚上の地球儀と、みごとなまでに

描かれたテーブルクロスなのである。

この「地理学者」とパリの「天文学者」の意味は対極にあるようで、イエス・キリストの福音の地図の必要性を示唆した「天文学者」と現実の地図の必要性を示唆した「地理学者」という解釈がエディ・デ・ヨングによってなされている。



フランクフルト
シュテートル美術館

追記

その後、東京都立美術館で2008年8月～12月に開かれたフェルメール展で偶然にも今回鑑賞することができなかったブラウンシュヴァイクのアントン・ウルリッヒ公美術館に所蔵されている「二人の紳士と女」を目にすることができた。ドイツ国内にあるフェルメールはこれですべて制覇したことになる。

おわりに

国際心理学会への公式な参加は今回で4回目になる。毎回そのお国柄を示すかのようなプログラムが楽しませてくれる。今回は非常に大きな会議であったにもかかわらず、派手さはなく合理的で効率的な運営が特徴であったような気がする。また、日本からの参加者は毎回多いが、今回は大韓民国や中華人民共和国などの極東の国々やアフリカからの参加も目立っていた。ただ個人的なことだが、P. G. Zimbardo 博士の講演が聴けなかったのが残念だった。

今回は2012年に南アフリカ共和国のケープタウンで第30回国際心理学会が開かれる予定である。少々遠いがぜひ参加してみたい。

XXIX International Congress of Psychology 2008 Berlin 参観記 (高橋)

参考文献

- 小林頼子 「フェルメール作品解説」 ユリイカ 8号 pp87-107 青土社 2008
朽木ゆり子 「フェルメール全点踏破の旅」 集英社 2006

発表原稿 (資料)

Japanese Students' Images of the Elderly

— An analysis by the Semantic Differential (SD) Method —

I. TAKAHASHI. Minobusan University, Yamanashi, JAPAN

M. TANAKA. Tokyo Future University. Tokyo, JAPAN

PURPOSE

There are some researches on Japanese students' images of elderliness in Japan. They, however, are mostly on their images of general elderliness, and not on the images of their own future old age.

Our research here has two purposes;

1. To compare Japanese college students' images of general elderliness with those of their own old age by using the Semantic Differential (SD) test.
2. To compare Social Science (SS) majors' images of elderliness with those of Social Welfare (SW) majors.

METHOD

1. Subjects

641 college students participated in this research. Of them 362 (M: 248, F: 114) were Social Science majors (Law, Economics, Business Administration, and Commercial Science) and 279 (M: 83, F: 195, 1: unknown) were Social Welfare majors. Their average age was 20.28 and the S.D. was 1.26. SW students had received a practical training of minimum ten months to nationally qualify as Certified Social Worker

2. Measure

The Semantic Differential (SD) test with 23 items was used. Each item required 5 Lickert type answers in each pair of adjectives. Subjects were asked to answer each item. The questionnaires were all answered in the spring of 2007.

RESULTS and DISCUSSION

1. Is there significant difference in students' images of elderliness between general elderliness and their own old age?

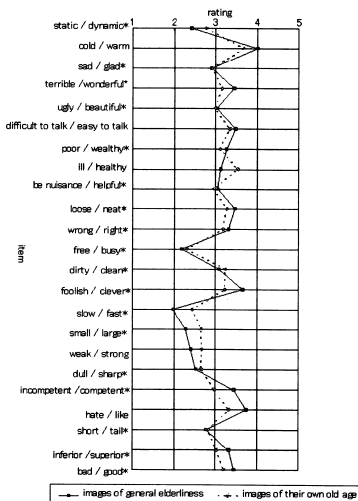


Fig.1: The scores of the subject's images of general elderliness and those of their own old age

Fig.1 shows the scores of “general elderliness” and those of “their own future elderliness” of SS majors and SW majors. It is seen here that the scores of their own elderliness were higher than those of general elderliness in the images of physical activities. In the images of mental activities, however, the scores of general elderliness were higher and more positively evaluated than those of their own old age. These facts suggest to us that the subjects constructed their images of their own elderliness as an extension of their

own current physical images, whereas their images of general elderliness were constructed based on elderly people's mental capabilities as a result of their experiences with those people.

2. Is there significant difference in the images of elderliness between the SS majors and the SW?

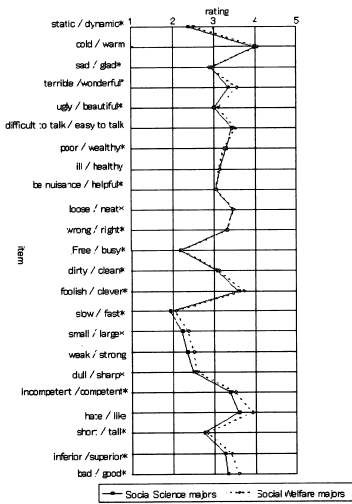


Fig.2: The average scores of the images of general elderliness

Fig.2 shows the average scores of SS majors and SW majors in the images of general elderliness. As seen in Fig.2, SW majors evaluated elderliness more positively than SS majors. Some significant differences were seen in items “fast – slow”, “large – small”, “incompetent – competent”, and “like – dislike”. In the images of their own elderliness, however, SS majors evaluated elderliness more positively than SW majors (See Fig.3). Differences were seen in almost all items. The items

which showed such differences were “busy – free”, “foolish – clever”, “fast – slow”, “sharp – dull” and “superior – inferior”.

Assumedly, SW majors had more opportunities to contact elderly people through their practical training and this led them to evaluate elderliness more positively. By contrast, SS majors evaluated their own elderliness more positively than general elderliness. Our assumption

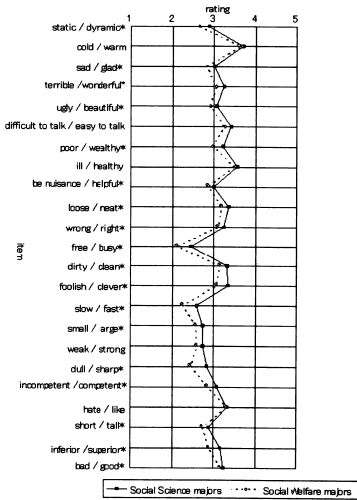


Fig.3: The average scores of the images of the subject's own old age

here is that their images were constructed based on their current physical abilities. It could be that their evaluation was influenced by their own wishes that they do not want to get aged.

3. What did we find in the factor analysis?

In interpreting subjects' images of elderliness, we used factor analyses in 21 items. Two items “wealthy – poor” and “be nuisance – helpful” were excluded for the reason that their communality estimates were too low in the correlation matrix.

The factors we obtained by the Main Factor Analysis in the Promax Rotation Method were the following 5 items: “capability”, “intimacy”, “dignity”, “exaltation” and “activeness.”

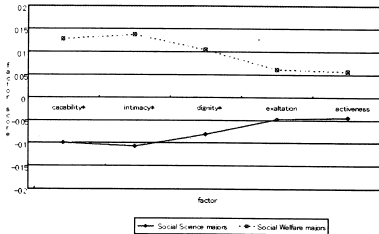


Fig.4: Factor scores of SS majors and SW majors in the images of the general elderliness

Fig.4 shows the factor scores of SS majors and SW majors' images of general elderliness. As seen in Fig 4, the factor scores of SW majors were higher than those of SS majors in 3 factors in the images of general elderliness. Significant

differences were found in the first factor “*capability*”, the second factor “*intimacy*”, and the third factor “*dignity*”. ($t = -3.041$ $df = 611$ $P < 0.0025$, $t = 3.391$ $df = 611$ $P < 0.0007$, $t = 2.698$ $df = 601.52$ $P < 0.007$)

In interpreting the images of subjects’ own elderliness, we also used the Main Factor Analysis in 23 items. The factors we obtained this way were the following 4 factors: “*maturity*”, “*capability*”, “*dignity*” and “*activeness*”.

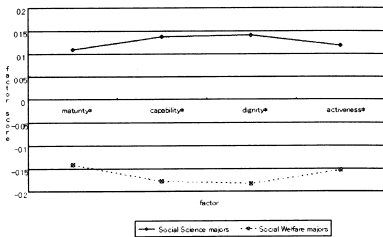


Fig.5: Factor scores of SS majors and SW majors in the images of their own old age

Fig.5 shows the 4 factor scores of SS majors and SW majors in the images of their own elderliness. Significant differences were found in all factors in the images of their own elderliness. The factor scores of SS majors were significantly higher than those of SW majors in all factors. ($t = 3.330$

$df = 619$ $P < 0.001$, $t = 4.267$ $df = 619$ $P < 0.000$, $t = 4.456$ $df = 619$ $P < 0.000$)

In our factor analyses, we found that both the images of general elderliness and the images of their own elderliness were composed of factors such as mental functions and physical abilities. SS majors showed a tendency to evaluate each function more highly than SW majors. It could be said that SS majors’ images of elderliness were closer to their ideal aging on the assumption that their current functions will continue to work throughout their old age.

SUMMARY

Our analysis suggests that practical training programs such as Social Welfare or Elderly Welfare Education exercise a significant influence in the construction of positive images of elderliness.

1. Japanese college students evaluated the images of “their own old age” more positively than “general elderliness”
2. *SW Majors*: SW majors evaluated elderliness more positively and more objectively than SS majors. In the construction of their images, their practical training influenced their image formation. It could be said that SW majors observed elderly people’s capabilities in a more objective way, which led to their positive evaluation of elderliness.
3. *SS Majors*: As a result of factor analysis, two components “*capability*” and “*activeness*” were found to play an important role in the construction of the images of elderliness. SS majors constructed more positive images of their own elderliness than general elderliness. It could be said that they based the construction of their images on their current capabilities.